

1995-25

王輝著 橋爪大三郎訳『中国官僚天国』

「全球化与現代化：中国与日本の共同問題」と題する著者と訳者との対談（『天津日報』1994年7月13日）を本書の紹介に代えよう。この対談は必ずしも本書を巡って行われたものではないが、両者の思想理解には有益であろう。

王輝：「冷戦」が終わって、いままさに「全球化」（グローバルイゼーション）の時代が始まりました。各国の政治・経済・文化のつながりがいっそう深まり、往来も頻繁になり、情報も飛び交っています。地球全体があたかもひとつの村のようになり、われわれはその村の住民のようになると言ってもよいでしょう。日本は工業の発達した国家です。あなたもこの問

題をいろいろお考えと思うので、グローバルイゼーションの問題について話し合ってははどうでしょう？

橋爪：去年、王輝先生との対談を日本で発表してから、大きな反響があり、多くの日本人の注意を集めました。先生のお話は、理論的な基礎があり、しかも実際のデータに裏付けられたお話で、日本人が中国をいっそう深く理解するのに大いに助けになったと思います。

いま、グローバルイゼーションについてお話がありましたが、私も全く同感です。科学技術が進歩した結果、世界は既に緊密に結ばれあっています。ある地域の問題や、ある国家の問題（たとえば、近代化の問題）でも、たちまち国際政治・経済に影響を与えてしまう。最近、日本には国内問題が多くて、日本の学者はみな国内問題に目を奪われています。けれども、国内問題を解決するには、全地球的な発展のトレンドというものから出発する必要がある。日本の政局の問題にせよ、平和憲法の問題にせよ、国際貢献をいかに進めるかという問題にせよ、みなそうなのです。

1989年にソ連が解体し、「冷戦」が終結しました。90年代から、世界は新しい時代に入りました。日本の学者はこれを、「不安定な時代」と言っています。ここで不安定というのは、二つの意味があります。ひとつは、客観的な意味で、世界はまさに、冷戦時代の二極世界から、ポスト冷戦の多極世界に変わりつつあるわけです。二極世界は、単純な世界でした。すべての国家は要するに、右か左のイデオロギーの違いによって対立していた。それに対して、多極世界は、物理学のn体問題が解けないように、きわめて不安定となります。もうひとつは、主観的な意味です。冷戦時代には、すべてものごとを固定した認識枠組みで観察していればすみました。マルクス主義のイデオロギーもそうですし、西側世界の世界観にしてもそうでした。マルクス主義は、政治・経済・文化・社会の相互連関を認識していたわけですが、その相互連関の取り扱いは固定していました。いっぽう、西側の人文科学は、政治・経済・法を、それぞれ独立な法則性に服するものと見ていましたが、その相互関係をつきつめて研究することはしませんでした。グローバルイゼーションの時代には、こうした相互連関が、国内で強まるばかりでなく、国際間においてもますます強まります。社会科学もこうした方面の研究を急いで進めていかないと、世界の発展に追いつかないと思います。

王輝：中国はすでに、社会主義市場経済をおし進めているわけですが、ここからしても、中国は、経済の法則性をよく認識しているわけです。このところ、社会主義国も資本主義国も改革を進めている最中ですが、中国はまあ

うまく行っているほうじゃないのか。それは、中国経済の発展の状況を見てもわかります。もちろん、中国の現代化はいろいろ困難にぶつかるだろう、短い時間には克服できない困難も予想されます。けれども、この前アメリカを訪問したら、かの地の学者たちは、みな中国びいきでした。中国の経済がこの調子で発展すれば、世界情勢に必ずや大きな影響を与えることとなります。この点、どうお考えになりますか？

橋爪：昨年の『ニューズウィーク』誌の予測によると、2000年までに中国の貿易総額は日本を超越し、2040年には、中国のGNPが日本やアメリカを追い越して世界一になると言います。2040年ではなくて、2010年にそうなるという研究者もいます。その時、中国という超大国が、世界に出現するわけです。こうした予想がどこまであてになるものかわかりませんが、二つの点だけは間違いないと思う。ひとつは、そう遠くない将来、アメリカを中心とする世界は終わりを告げるということ。もうひとつは、それに代わる中心がもし現れるとしたら、それは中国だということです。いま日本では、ますます多くの人々が、中国はまもなく日本を追い越すに違いないと認識し始めている。アメリカでも、クリントン政権がアジア問題担当の責任者を選ぶときに、日本問題の専門家でなしに、中国問題の専門家を選んだのです。これはアメリカが、これまで以上に中国との関係を重視し始めたサインだと思う。

王輝：外国にそのように、中国の経済発展について楽観的な見方をする人々が多いということは、一人の中国人として、とても勇気づけられます。けれども一人の学者としては、この問題を冷静に分析しなければならない。第二次対戦後の日本はまったくの廢墟でしたが、二十数年の復興・調整・発展の期間を経て、1968年、つまり明治維新百周年の時期には、資本主義世界で二番目の強国になりました。日本と比べて中国は、仮にさっきあなたがおっしゃるようになったとしても、その発展の速度は決して速くない。しかも、中国の人口は日本の10倍、アメリカの5倍もある。経済規模が日本の水準に追いついたとしても、国民一人あたりの収入は、日本の十分の一、アメリカの五分の一というわけです。こうしてみると中国の予見できる将来は、楽観するわけには行きません。中国は改革開放、現代化の建設を進めていて、もちろん世界の先進国の水準に追いつくはずです。中国には11億の人口があり、もしも中国が現代化に成功を収めるならば、必ずや、世界の平和と発展に大いに積極的な寄与をするはずです。日本はすでに現代化を達成した国家ですから、われわれは日本が現代化建設にたずさわった経験を大いに重視しなければならない。去年日本を訪れたときに、私は、

日中両国の文化は同根で、儒教の両国文化に対する影響は大きいとの思いを深くすると同時にこの両国にはあちこちに異なっている点があるとも思いました。両国の文化的差異やそれが両国にもたらす影響について、お考えをお聞かせ下さい。

橋爪：この問題については、日中両国の学者の研究がたくさんあります。ただ、私の考えを言えば、儒教の文化は戦後日本でほとんど影響をもっていないと思う。そこで、両国の文化の異同ということになれば、やはり差異が大きいと思うのです。たとえば、中国は大国で、歴史的には中央集権的な政治制度、地主による土地所有制度が続いてきました。このため、官僚制度がとても発達しました。それにひきかえ日本は小さな島国で、またヨーロッパの封建制によく似た荘園制（領主制）を発達させました。このため、古代において日本は中国から当時の先進文明を多く取り入れたのにもかかわらず、官僚制を学ぶことができなかったのです。日本の武士は、官僚であって、地主ではありません。そのポストは世襲で、中国の地方官僚と違って担当区域をしょっちゅう変わるといことがありません。このため、古代において日本は統一的な中央集権制度の代わりとして、集団意識がまことに強烈なのです。武士とその土地の農民とは、一個の共同体を形成します。ですから現代の日本企業でも、従業員への企業に対する帰属意識がとても高くなっています。日本と比較するなら、中国では個人意識が強烈だと言えるでしょう。

王輝：その点は、私も気がつきました。個人意識が強烈だというのは、けっして悪いことではないのです。けれども、経済的にまだ発展途上の民族にとっては、急いで世界の水準に追いつき追い越すには、そして現代化を実現するには、強烈な集団意識があればこの民族を一個の強力な凝集力でもってまとめあげることができるのです。日本の現代化の成功は、おそらくこの点と関係がある。

橋爪：その通りです。けれども、中国では政治的な一致ないし統一を強調するのですが、これは日本人の集団意識が現代化に果たしたのと同じ役割を果たすことができるのではないのでしょうか。

王輝：中国は市場経済を実行しはじめたのですから、この方面の問題にはもっと注意が必要です。個人の利益を否定してはなりません、個人の利益しか考えないのは間違いです。同時に、集団の利益、社会の義務を考えなければならない。

橋爪：中国は改革の初期において、この問題をなかなかうまく解決したと思うのですが、今後もひきつづきうまくやっていくためには、市場経済の秩序

を打ち立てることがとても大切だと思います。

王輝：それをうまくやりとおせるためには、国民全体の素質を向上させなければならぬという問題がある。

<途中略>

橋爪先生は、天津の古い友人だと言えます。天津の状況についてもよくご存知です。さいごに、将来の発展についてのお考えをお聞かせ下さい。

橋爪：中国の改革開放は、南方に始まりましたが、この数年来、天津の歩みもだんだん速くなってきていると思います。歴史的に見て、天津はかつて、北方の重要な経済センターでしたし、また最大の港湾都市でもあります。天津の教育水準は極めて高く、市民の素質も相対的に良好です。このため、天津には、経済や商業貿易の発展の基礎があります。特に天津は、東北アジア経済圏に位置し、日本や韓国との輸送にとっても便利です。東北アジア経済圏がこれから形成されていくなかで、天津がこの経済圏で大きな役割を果たすと思います。私が中国に来るまえに日本経済新聞を見ましたら、日本のトヨタ自動車は天津に進出することを決めた、と書いてありました。これは日本にとっても、大きな影響があります。天津の友人として、私もこのことをとても嬉しく思います。

1994年度日中社会学会活動記録

I. 研究活動

1. 第6回研究大会 1994.6.1 早稲田大学国際会議場

《研究報告》

夏氷「おみこし型とバス型

—日中企業集団心性の比較—」

蔡林海「中国の産業化と労使関係の史的展開

—私的企業の『国有化』から国有企業の『民営化』へ—」

苑復傑「中国の経済社会の変化と教育改革」

《講演》

橋爪大三郎「21世紀・新世界の秩序」

2. 講演会及び研究会

94.11.12 研究会 陸学芸「現代中国と社会変動」立教大学

95. 1. 7 研究会 張 萍「現代中国の社会病理—性問題を中心に—」

II. 諸活動

94. 6. 1 第15回総会開催

『日中社会学研究 第2号』発行

『日中社会学会研究ネットワーク 第2号』発行

94. 7. 「日中社会学会ニュース」第8号

94.12. 「日中社会学会ニュース」第9号

94.11.12 理事会 早稲田大学人間総合研究センター

95. 3.22 理事会 早稲田大学人間総合研究センター

95. 5.12 理事会 早稲田大学人間総合研究センター

95. 6. 2 理事会 早稲田大学人間総合研究センター

雷潔琼先生（中国全人民代表大会常務委員会副委員長、中国社会学会名誉会長、北京大学教授）の来日